

黎明館・専修大学合同企画展記念シンポジウムの記録

日時：平成23年12月18日 14：00～16：30

場所：鹿児島県歴史資料センター黎明館 講堂

パネリスト：徳永 和喜（黎明館学芸課長）

永江 雅和（専修大学経済学部教授）

瀬戸口龍一（専修大学大学史資料課）

司会：青木美智男（専修大学大学史編集主幹）

（青木）

これから「田尻稲次郎の生涯とその功績」というタイトルでシンポジウムを開始したいと思います。司会は私、青木と申します。専修大学史の編集主幹をしております。よろしく申し上げます。それでは最初に主催者を代表しまして専修大学理事長・学長の日高義博からご挨拶申し上げます。よろしく申し上げます。

（日高）

専修大学理事長・学長の日高でございます。本日は田尻稲次郎先生の出身地であります、ここ鹿児島において田尻稲次郎の生涯を振り返り、その業績を検討して評価を出してみようという試みのシンポジウムを開催することになりました。鹿児島でも、まだ田尻稲次

郎という名前をご存じない方がかなりいらっしゃると思います。財政学などを研究している方にとっては、この名前を忘れては研究が出来ないというほど偉大な方でありますし、専修大学の関係者であれば四人の創立者のうちの一人ですから、その名前を知らないという卒業出来ないというほどでございますけれど。

しかし、生い立ちを含め、どういう研究の過程を経て、そして研究と実務の架け橋のなかで研究業績をどういうふうに出され、かつ日本の財政学の基礎をどのようにつくったのか、まだまだ全体が明らかになつていない点が多くあります。こういうシンポジウムや研究会などを一つずつ重ねることによって専修大学の創立一五〇年、今から約二七年後になります、そのときには大きな足跡というのが明らかにしていることを願っているところでございます。本日のシンポジウムの真摯な議論によって、田尻先生の功績や行路が一つでも明らかになることを強く祈っている次第でございます。最後までご清聴いただきしたいと思います。

（青木）

それでは本日、この企画展を通して大変お世話になりました創立者・田尻稲次郎のご子孫の方々にこのシンポジウムに合わせてお出

でいただいております。そこで参加されている会場の皆さんにご紹介したいと思しますので、壇上にお上がりいただけませんか。

ではご紹介をさせていただきます。奥野英二さんです。申し訳ありませんがご出席の方々を代表して皆さんのご紹介をいただけますでしょうか。

(奥野)

はい、大変僣越ではございますが、私田尻稲次郎の孫でございます。田尻稲次郎には息子が四人、娘が七人いたんですが、もうだいぶ前に全員他界しております。したがって今残っておりますのが孫の五、六人でございます。ただ孫と申ししても私の母は、田尻稲次郎の末の娘、六番目なんです。私自身も末っ子なものですから、ずっと年が離れておりまして私が生まれたときにはすでに稲次郎さんはもちろん、奥様も亡くなっておられました。

ただ稲次郎さんの息子さん、それから娘さんですね。私から見れば伯父さん・伯母さんが非常に仲良くして私の家にも何回も来て、稲次郎のことを色々、子どもの私に話してくれたことをいまだに覚えているようなことでございます。それで本日は大学からのご好意でこの会に東京の方から参った次第です。

それではご紹介だけさせていただきますと、私はしたから二番目の娘・誉(たか)、「誉」(ほまれ)という字ですが、その息子でございます。そしてここにありますのが私の四人兄妹のうえの姉な

んですが、嫁ぎまして今は小出という名前でございます。それからその隣りにおりますのが、さらにその娘でございます。曾孫ということでございます。徳田陽子です。隣におりますのは私の連れでございます。旅行するときはいつも一緒に来るものですから。

ということ今回四人で参りまして、昨日から色々この会でお世話になっておりまして、私も何十年ぶりにまた改めて自分のお祖父さんのことを色々頭に浮かべている次第でございます。本当にこの会にご一緒させていただきましてありがとうございます。

(青木)

どうもありがとうございます。それではこれからシンポジウムに入りたいと思います。

今日、午前中の映画『学校をつくろう』をご鑑賞なされていかがだったでしょうか。それから企画展をご覧になられた方もいらっしゃると思います。田尻稲次郎という人物の名前はたゞいま理事長・学長からお話がありましたように鹿児島の方々にあまり知られていないと思います。しかし日本の近代の歴史を考えると大変重要な人物でございます。つまり専修大学の創立者であると同時に日本近代の政治史や経済史や教育史において非常に重要な人物であるということ、これからのシンポジウムを通してぜひ皆さんに知っていただきたいと思っております。また時間が二時間ちょっとありますので、本日ここにお集まりの皆さんのなかからもご質問やご意見

をいただきたいと考えております。よろしくお願いします。

最初にお話しておきますと、この田尻稲次郎という人物について今日は大きく三つの話をしていただきたいと思えます。まず先ほどから話がありますように「日本の財政学」、これは国家を運営していくうえで不可欠の学問でございます。予算案の執行から税金、つまり租税の問題が絡むあらゆる面で国家を運用していくうえでなくてはならない学問。こういう学問を日本の近代国家に最初に取り入れ、そしてそれに関する研究を一貫して続けてきた人物が田尻稲次郎です。学者として、またその知識を実際に大蔵省で運用してきた田尻とはどんな人物であったかということを検証する必要があると思えます。

それからもう一つは、日本の近代国家は帝国大学、後の東京大学のわずかな卒業生たちの力だけでは絶対に運営、発展させることは出来ませんでした。多くの日本国民のなかから優れた人材を養成して、そして日本の国家の発展に役立つ人間をつくらなければならぬ。田尻はこのような考え方を持っていました。本日の映画にもありましたように、アメリカ留学時代の仲間たちと帰国したら「学校をつくらう」と誓っていました。

東京大学の前身である大学南校、その後、この学校を改組・改称して出来た東京大学においては専門教育はほとんどが「お雇い外国人」と呼ばれた学者たちに依存していました。しかしこれでは新しい発展は不可能であるわけで、日本語で法律や経済学の専門教育を

やろうと考えたわけです。

そして田尻はアメリカ留学時代、自らの専門としてあえて経済学を選んだわけですが、なぜ経済学なのか、薩摩藩士として教育を受けてきたなかでどうして経済学を選んだのか。この辺のところについては大変興味深い問題ですので、今日は三人の先生方からじっくりお話いただきたいと思っております。

それからもう一つは、高等学校の教育を受けた方々であれば必ず日本史の授業で習う人物がいます。幕末の農村改良運動を指導した二宮尊徳という人物です。特に戦前に教育を受けた方々は二宮尊徳についての色々な逸話を聞いていると思えます。

この二宮尊徳と同時代に同様の仕事を成し遂げた人物がいます。それは現在の千葉県、房総半島の地域で、実際に独自の思想を持って農村改良運動に携わった人物です。それが大原幽学です。最近では高等学校の教科書にも必ず出てくる人物です。この大原幽学を世に知らしめ、大原幽学に関する様々な研究が始まるきっかけをつくった人物が実は田尻稲次郎でした。

田尻はなぜ大原幽学を世に紹介したのか、田尻と幽学の思想はどのように関わっているのか、それは薩摩藩の気風と何か関係があるのか、それともアメリカ留学の影響なのか、など田尻と幽学については様々な疑問がございますが、亡くなるまで幽学を尊敬し、質素で、服装も構わず非常に素朴に生きてきたその田尻の人間像についてもぜひ触れてみたいと思えます。

今日は三人の先生をお招きしました。私のお隣は専修大学の経済学部で日本経済史の教鞭を執っておられます永江雅和先生。現在日本近代の経済史研究において若手のなかの第一人者でございます。

それからもう一人は、この黎明館の学芸課長をされております徳永和喜先生です。徳永先生は実は幕末維新期の島津家、それから薩摩藩全体に関する緻密な研究で大変著名な方でございます。その徳永さんから薩摩藩士としての田尻像についてお話をいただきたいと思えます。

もう一人は、一番左におられる専修大学の職員で大学史の研究をされております瀬戸口龍一さんです。瀬戸口さんが今回の企画展のほとんどを担当され、展示のギャラリートークが出来るほど内容に詳しい方です。瀬戸口さんは専門の研究テーマは違うのですが現在は日本の大学史の研究もしております。大学史の研究は、教育史のなかではマイナーな方でございます。これから一番解明しなければならぬ分野です。私立大学の前身である専門学校の研究を通して田尻稲次郎についてお話をさせていただきたいと思えます。

それでは最初に田尻稲次郎の生い立ちから始めたいと思えます。最初に徳永さんから薩摩藩と田尻稲次郎、薩摩藩の風土と田尻稲次郎、そういう観点からお話していただきたいと思えます。よろしくお願ひします。

あとお断りしておきますけど本日は「田尻稲次郎先生」とか「松方正義先生」などという尊称は使いません。研究上の問題ですので

全員呼び捨てにします。その点ご了承下さい。それでは徳永先生お願ひします。

(徳永)

徳永でございます。よろしくお願ひいたします。黎明館が専修大学の全面的なバックアップをいただきまして、しかも経済に関する企画展を開催するということは稀なことでございます。というのも我々歴史分野の人間では、なかなか経済史とか経営史とかそういうのを扱うことは難しく、それを企画展という形で、つまりモノで見せるというのはもつと難しゅうございます。今回はそういう意味で専修大学様には大変お世話になりました。本当にありがとうございます。お礼申し上げます。

私の場合は経済とか経営というものにちよつと疎いものですが、ある意味フロアーから自分が考えたことを質問するような気持ちでのお話になるかと思えます。

まず薩摩の土壌として、ちよつと文化的・教育的なことを考えたときに、今度の企画展のテーマは「日本の財政学を築いた薩摩藩士」という、松方財政を理論的側面から支えた田尻稲次郎という方がおられたということについてなんですが、薩摩の土壌として財政というのを薩摩の人間、特に武士はどう見ていたかということですね。実は松方は「財政は嫌いだ」と言っているんですね。薩摩の武士としてはお金を扱う、あるいはそういう財政というものに対し

て、新しく近代化、明治に移るその過程における段階では、財政というものは「嫌いだ」ということを松方自身が言っています。それです。そのなかで松方に財政を勧めた人間は誰かということですけど、安田轍蔵という人物でした。この人はご存じの方もいらっしゃるかと思いますけども、薩摩藩が幕末の資金を確保するために「琉球通宝」という通貨を幕府に許可申請したときの重要人物で、非常に経済学に明るい方です。

この方が松方に対して経済家になることを勧めたということが『松方正義関係文書』という史料のなかに書いてあります。そして松方は「今までそのような考えを持ったことは一度もない」とはつきり断っています。その後安田は重ねて松方に経済の道を進むように勧めるんですけども、逆に松方のほうは不快だったのか安田に対して、「なぜそんなことを私に言うのか、私は財政の道というのは嫌いだ」と言っています。押し並べて薩摩藩士の場合は恐らくそういうふうな考え方があるんだろうと思うんです。

そういうなかで松方はこういうことを言っています。「幕府でも諸藩でも財政家で名を馳せて、最後まで名声を得た人はいない」。

このときに松方の頭のなかにあったのは調所広郷の改革だったと思います。日本一貧しかった薩摩藩が、五〇万両とか百万両とかの蓄財を得て、斉彬という人物がそれをもとにしながら集積館事業を行い、そしてそういう考え方が大久保利通や次の世代にずっと続いていく。そういう流れが頭のなかにあったと思うんです。実際にこの

段階では松方自身は「私は経済を担う気はない」「そういうことをする気はない」と言っています。

ではなぜ安田轍蔵という人物が、松方にそういう能力、資質を見出したのかという点が非常に大事だと思うのです。財政家の資質とは何かということ、安田は次のように言っているんですね。財政家の資質とは何かと言うと「財政家たる者は金銭のことを終日考えているような人間では駄目である。あなたのような金銭に欲がなく正義漢が強い人、これが経済の道に進むには最高に良い資質だ」と、そしてそれを松方は持ち合わせていると述べている。

ですからこの企画展のタイトルである「日本の財政学を築いた」という点で、最も重要なことは、どの時期に財政というものが重要であるという認識が変わってきたのかという問題です。そういう非常に大事なところを先生方のお話のなかにいただけるんじゃないかと思つて、逆にそういうのを聞き出来るのではということを楽しみにして参りました。一応薩摩の教育的土壌ということでもちよつとだけお話をさせていただきました。

(青木)

ただ今徳永さんからお話がありましたように、薩摩藩の土壌だけではなくて江戸時代の武士全体の気風のなかなには、商人的な行動に対する軽蔑の気持ちはあります。お金を儲けるとか、蓄財をすることかという気風に対してある種の違和感を感じ、そういうことが非常

に強い土地柄で田尻がなぜ財政や経済に関心を持ったのかという点も大変興味深いですね。

実は専修大学の四人の創立者はアメリカに留学しています。彼らはアメリカで出会い、同じような志を持つようになって学校をつくらうということになったわけですが、この時期、海外に留学した日本人は多く、明治四年（一八七二）には二百数十人が留学しているわけですが、その大半は何を学びに行ったのかと申しますと医学や理工系を除けば法律学でございます。近代国家にとってどうしても必要な学問でございますから、それを欧米で学んで日本に取り入れるということでございます。

そのなかで何人か異質な研究行動を取った方々がおられます。その一人が田尻稲次郎。もう一人が専修大学創立者の一人・駒井重格でございます。駒井重格は、佐幕の会津藩と並ぶ伊勢の桑名藩の出身の士族でございます。

駒井については一昨年創立者展の第一回目として桑名市博物館と、駒井が晩年、現在の一橋大学の前身である高等商業学校の頃に校長を務めた関係から一橋大学、そして専修大学の三機関共催で駒井重格展を行いました。そのときにメインのお話をさせていただいたのが、実は永江先生でございます。永江先生は一橋大学の卒業生でもあります。

ちなみに本日のコメンテーターは三人全員が、九州出身者でございます。永江先生が福岡県久留米市、それから徳永さんが鹿児島

ですね。瀬戸口さんも長崎県佐世保市の出身でございます。九州に関係している方々が今日この壇上に上がっているわけです。先ほどご挨拶いただきました日高学長も、それから本日ご出席の大学経営を担っております富山尚徳専務理事も隣りの宮崎県出身です。私を除いて九州の人々が今日話をしている。ですからこの三人の話はその意味で非常に郷土色豊かな話になることでしょう。

そこで永江さんの専門の立場から、なぜ田尻は経済学を選んだのか。そしてその後で先ほどから話が出ております松方正義という大藏卿や大藏大臣を長く務め、明治期において一番長期的に日本の近代国家の財政を運営してきた人物の最も有力なブレーンを田尻は務めてきたわけですが、その辺の経緯についてお話をいただき、あわせて彼がどんな学問を学んだのか、また田尻は自らの財政学の知識をどのように国家財政に適用しようとしたのかなどということについてもお話をいただきたいと思っております。

（永江）

永江でございます。今ちょっと当初想定していましたよりもたくさんさんのことを喋るように言われたような気がするんですが、いくつか順を追ってお話したいと思います。先ほど徳永先生より松方正義という方の名前が出ました。たぶん鹿児島ご出身の方であれば松方正義公というのは非常に有名な存在であるかと思いますが、私が大学の授業でいきなり松方正義と言ってもポカーンとされる学生さんが多

いので、ちょっとそこからお話したいと思います。

私が専門としているのは日本史の分野のなかでも経済史という分野でございまして、日本経済の歴史を研究する分野です。殊に財政という国家のかじ取りについてお話しするときに、私が学生時代 私の先生であった方から教わったことがございまして、戦前の日本において偉大な大蔵大臣は三人いたと教わったわけです。筆頭が松方公。大隈重信を出さずに松方公が出てくるんですね。二人目が井上準之助といまして、これは世界恐慌・金解禁のときの大蔵大臣でございまして、それで三人目が高橋是清。高橋是清は今、「坂の上の雲」のテレビでもちょっと登場したんですけれど日清戦争の戦費調達をイギリスで行ったことで名を成した人物で、その後昭和恐慌から日本経済を立ち直らせた人物でございまして。その三人のまず筆頭で出てくるのが薩摩出身の大蔵大臣でありました松方正義であるというふうに教わったわけでありまして。以後は公とは言わずに松方正義にさせてもらいますが、松方が行った一連の政策を松方財政というふうに呼んでおりまして、これが明治初期の混乱している日本経済の財政を安定させた非常に重要な仕事だったと教わったわけです。

また少し前置きが必要なんですけれど、明治維新のときの明治政府というのは非常にお金がなかったと言われております。つまり江戸幕府というのは非常に分権的な体制でございまして、幕府は直轄領の約八百万石を掌握しておりましたが、日本全体の石高は約三千二百

万石であると言われていました。明治政府が江戸幕府の権威をすべて奪い取ったとしても全国の石高の約八百万石、四分の一からしか税金を集められない。これでは近代国家が運営出来ないという当時の明治政府の担当者は考えます。それで行いましたのが地租改正でございまして、地租改正が完全に軌道に乗るまでには少し時間がかかりました。その間どうやって国家財政のかじ取りをするのかということなんですが、主に行われましたのが今日映画でも少しお話ができましたように紙幣の発行であったわけですね。

不換紙幣と言われますけれども、政府が自らお札を発行して財政支出に充てる。ちょっと国債との区別が非常に曖昧でございまして、明治時代の初期の財政のデータを見ますと財政収入の約三〇%以上が紙幣発行収入によって賄われていました。ただこのようなやり方で紙幣を発行し続けていきますとインフレーションが起これば物価が上がってしまうんです。貨幣が大量に発行されすぎてしまった結果、物価が上がってしまった一般的な国民の生活を苦しめてしまう。特に家禄や金禄公債の利子収入が固定している士族は苦しみます。

そのほか当時は紙幣というのは銀行が発行することも出来ませんでした。当時国立銀行というものがつくられますが、国立銀行も勝手に銀行券を発行することが可能で、政府がお金を発行して銀行も銀行券を発行した結果、物の値段がどんどん上がってしまいます。こういうやり方をすると景気が良くなる側面があることもあるんですけど

ど一般の民衆の生活はやはり苦しいということで、社会が混乱してしまいます。これを何とか安定させたい、という取り組みを行いましたのが松方財政でございます。

もう一つはやはりこの鹿児島との関連で言いますと西南戦争ですね。西南戦争が起こった際、明治政府は山県有朋を総司令官に任命し、巨額の軍費を使って西郷軍を鎮圧するというを行いました。これも物価上昇の原因になりました二つの原因からですね。もともと政府が財政難である。さらに西南戦争によってより巨額の軍費を使ってしまった。その後の混乱から日本経済を安定させていく大きな仕事を、同じ薩摩人である松方正義が行ったというのが松方財政なんだと。それによって日本は近代国家としての財政を形作る事が出来たんだと。そのように大学の授業で教わりましたし今でもそういうお話をしているわけです。

それで松方は大臣でありましたが、こういった大きな仕事をするに当たっては後ろで有能な実務部隊が必要になります。大蔵次官であるとか会計局長であるとか国債局長であるとか。そういうところで非常に大きな役割を果たしていた人物として名前が挙がってくる筆頭が今回のテーマになりました田尻稲次郎です。そのほかに阪谷芳郎であるとか添田寿一であるとかも出てくるんですが、これは私も専修大学に赴任して初めて気がついたことなんです、専修大学と非常に縁が深い方々が多い。近代日本の理財、当時は理財学とも申しました。理科の「理」に財産の「財」と書きます。その明治

初期の日本の理財学を牽引していた、率直に言えばつくり上げた方々が専修大学の創立者でもありましたし、当時の大蔵省の主要な実動部隊を務めていた方々であったというふうに教わったわけです。

したがって専修大学の歴史のうえでも当然非常に重要な方でありますが、明治時代の日本の経済を考えるうえでも非常に重要な人物であります。もう少し時代が下りますと日清・日露戦争も巨額の軍費を必要とした非常に日本の経済にとって大きな戦争であったわけですが、戦争を実行するに当たっては当然お金、つまり戦費が必要になる。戦争というのは始まったらいっ終わるかわからない。それを税金のなかから、あるいは一般会計なのか特別会計なのか国債を発行するのか、そういったことも含めまして全体でかじ取りをする人たちが必要になります。そこで非常に活躍された人としても、やはりこの田尻の名前が出てくる。

ということ、明治財政史というものを考えるうえで非常に重要な人物で明治時代における名実ともにミスター大蔵省と言って差し支えない人物であったというのが田尻稲次郎の紹介でございます。

それからもう一つ、なぜ田尻稲次郎はアメリカに行つて経済学を学んだのかと、そこまで喋つてまたバトンを渡そうと思います。正直言いましてなぜアメリカかというのは史料的にあまりはつきりしたことが出てきておりません。ただ当時アメリカが日本にとつてどのように学ぶ意義のある国であったかということについては手がか

りがございます。通常、我々は日本史と世界史というものを別々に学ぶものですから、よく学生に質問するんですけども、日本を開国させたのはペリーであってアメリカです。しかし、日本の対外関係史を考えたときにアメリカというのは暫く日本の明治史上から陰が薄くなる時期がございます。日本を最初に開国させたにもかかわらず、その後の日本に対する外交関係でよく出てくるのはイギリスであつたりフランスであつたりロシアであつたりするわけです。

「アメリカはこの間何をしてたのかわかりますか」と学生に聞くんですけど、やっぱり日本史と世界史を別々に学んでいると「んっ？」という感じになります。

実はアメリカでは一八六〇年に南北戦争が起こっています。「風と共に去りぬ」という映画がありまして、スカーレット・オハラが活躍する映画ですけどもアメリカにとつても大きな戦争、内戦が起こる。これで暫く日本に対する関与が小さくなってしまいます。ただやはりアメリカは南北戦争の結果、西南戦争直後と非常に似た状態になる。つまりインフレションを起こしてしまうわけです。そのインフレションをどうやって鎮めてアメリカ経済を安定させるかという課題と、日本が戊辰戦役から西南戦争を戦つたあとでインフレションが発生して、それをどうやって収めるかという課題は非常に近いものがあつたと考えます。

田尻稲次郎がアメリカへ渡るときにそこまで考えていたかどうかは不明でございますけれど、田尻がアメリカで日本経済、日本に

とつて役立つ知識を持つて帰ることが出来る。経済学を学ぶことに意義があるというふうに考えるきっかけは当時のアメリカの状況に関係があつたのではないかと。史料上のところが私もはっきりしてないので仮説の段階でございますけれども、そのようなことを考えております。

ではまたあとでお話しますので一度お返しいたします。

(青木)

田尻がなぜ経済学なのかという点については、今のお話でおわかりただけなことと思います。もう一つ大事なことをつけ加えますと、当時のアメリカ合衆国は南北戦争が終わつたばかりで国家体制がまだ今のように整っていない。どうやってさらに国家を発展させていくかを考えたとき、やはり人材養成のために教育・研究が必要である、と考えたわけです。

皆さんは現在、大学の制度として、大学という四年間がありそのうえに大学院があるのが普通だと思われていると思いますが、実は世界の歴史のなかで大学のうえに大学院をつくつたのはアメリカが最初なのです。ハーバードとかイエール大学などに大学院が開設されるのですが、アメリカの大学は速成的に実践力のある優れた人材をたくさんつくることを目的としていました。しかしそれでは足りないという人のために大学のうえに二年、もしくは三年間の大学院制度を設け専門的な学問・研究を深めて新しい国家体制をつくつて

いこうとしたのです。田尻もそのほかの専修大学の創立者たちも大学院行つて学んでおります。

そこでもう一つ大事なことは、アメリカは何を学問の基礎にしたのかということ。考えられるのは先進国のイギリス・フランスの学問を取り入れることです。つまりイギリスやフランスの学問の成果を同時に学べるというところが、アメリカへ留学した田尻たちにとっては非常に重要だったと思います。

さらに、もう一つ日本のほとんどの留学生がアメリカに行つてかなりショックを受けたと思われることがございます。日本はアメリカと修好通商条約を結びます。あのハリスと結んだ通商条約です。そのあとイギリスやフランスやロシア、オランダとも同じような条約を結ぶわけですが、この条約が不平等条約だったということは周知の事実です。治外法権を認め、関税自主権を放棄したことは大変なことなのです。ただ日本の場合には中国と違ひまして外国人を居留地のなかに押し込め一〇里四方外の遊歩を認めませんでした。がそれでも、居留地内に入つてしまえばどんな犯罪を犯してもそれを取り締まつて、罰することが出来ないという、近代国家に相応しくない状況が存在したわけです。そして関税を自由に決められないのは、国内産業を保護出来ないということ、何とかして条約を改正しなければならぬということになるのですね。

その条約改正を実現するためには日本が欧米並みの近代国家にならなければならない。鹿鳴館のような表向きの近代化では駄目で、

それを根底から変えるために必要とされたのが教育なのです。教育が国民全体に行きわたり、そこから新しい日本の社会をつくつていく、これが近代化のための基礎的条件なのです。そのことと不可分に結びついて留学生たちのなから帰国したら新しく学校をつくらうという動きがあったのだと思うのです。

その点を含めまして実際に田尻たちは何をやるうとしたのか。そういうことについて、これから瀬戸口さんにお話していただきたいと思ひます。

また「専門学校」と言いますが、現在の専門学校の位置づけとは違ひます。明治一二年公布された「教育令」ではこれは単科大学を意味します。総合大学は東京大学。専門学校は単科大学として位置づけられていますので、UniversityではなくCollegeです。その辺の事情をこれから瀬戸口さんに詳しくお話していただきたいと思ひます。

(瀬戸口)

大学史資料課の瀬戸口と申します。どうぞよろしく願ひいたします。

私の方からは、大学史という観点で田尻を含めた当時のお話をさせていたただきたいと思ひます。最初に青木先生からちよつとお話がありましたけども、明治国家の設立後、非常に多くの日本人が海外に留学します。これは日本政府が積極的に推し進めた政策の一つ、

いわゆる海外留学奨励策に乗った動きとして、明治三年くらいから始まるわけです。

そのなかで、先ほどもお話がありましたけれども多くの日本人が留学先として選んだのがアメリカでした。もちろんアメリカだけじゃなくイギリス・フランス・ロシア、変わったところではベルギーやスウェーデンにも留学しています。そこで何を学んだのか。一番多かったのが法学を専攻した留学生ですが、それ以外にも医学や建築・工学・文学などの分野を学んだ日本人も多くいます。さらに陸軍や海軍も多くの若者を海外に派遣しました。洋式軍隊を学ばせるためです。そういった意味では田尻稻次郎という人物が経済学を選んだということは非常に珍しいというか稀有なことだと言っているかと思えます。

田尻がなぜ経済学を選んだのかということに関しての史料は残ってはいませんが、鳩山和夫、これは元総理である鳩山由紀夫の曾祖父に当たる人物ですが、彼のように法学の分野には非常に優秀な人物が多かったこともあって、人の少ない経済学を選んだというようなことを言っているか、それが本心から言ったのか、照れ隠しから言ったのかということとはよくわかっておりませんが。

ただアメリカに留学し、大学に入学した時点で自分の専攻として経済学を選び、経済学を学んだことが、その後の一生を左右する決定であったということは言えると思います。

もう一つ当時のアメリカの大学なんですけども、先ほど青木先生

からありましたがちょっと補足させてください。当時のアメリカの大学というのは規模も小さく、基本的には教育・研究の場ではありませんでした。大学における教育・研究に一番力を入れていたのはドイツです。アメリカの大学というのは基本的には研究を行う場というよりも、どちらかという道徳哲学のような精神修養的な側面を教える場であったわけです。全寮制でしたし、教員の仕事は研究ではなく、舎監といったほうがいいかもしれませんが、寄宿舎の管理がメインでした。一日二四時間ほとんどの時間、先生と生徒が一緒に暮らし、学生たちを指導していく。大学ではそれほど高度な研究が行われていなかったとも言われています。

そのため研究者をめざす当時のアメリカ人たちの多くはヨーロッパに留学しました。イギリスやフランスであったり、ドイツであったり、イタリアだったり。そういうところの大学に行って初めて大学というのは教育・研究の場であるということを選んで帰ってくるわけです。

そういったヨーロッパ帰りの新進気鋭の研究者たちが、アメリカにおいてようやく教育と研究の場をつくらうというので大学院というものをつくり上げていくわけです。それがちょうど田尻や相馬胤胤、目賀田種太郎といった専修大学の創立者たちがアメリカに渡った時期ということになります。

ですからこの時期のアメリカの大学院の先生というのはアメリカ人でありながらアメリカで教育を受けていないわけです。つまり

ヨーロッパで教育を受けてアメリカで教えていた。田尻の教員であるサムナーという先生もヨーロッパへの留学経験を持つ学者です。ですから基本的にアメリカの大学ではアメリカ式の学問を教えないというような現実があったということは一つ言えるかと思いません。そういったなかで田尻たち留学生というのはアメリカにいながら、ヨーロッパの学問を学ぶことが出来たということが言えるんじゃないかというふうに思います。

日本のことについて話を戻しますと、私立学校、今の私立大学というものは法制的な側面から見ると明治期には「大学」ではありません。明治期に「大学」と呼んでいいのは東京大学、京都大学などの官立学校だけということになります。私立は私立学校もしくは専門学校という位置づけになります。そして専修学校が出来た明治一三年というのは、専修学校をはじめ今の明治・法政・中央といった高等教育機関が続々と出てくる時期に当たります。

なぜそういった私立学校が次々と設立されていったのでしょうか。これらの学校の多くは専修大学の創立者と同じようにアメリカやフランス、イギリスから帰ってきた留学生たちが、自らが学んだ知識を日本の若者たちに教えたいという強い想いを持ってつくられた学校です。今日の映画にあったように専修大学の創立者たちの想いというのは、そういった意味ではその当時の留学生たちの想いと同一なわけです。明治初期の留学生たちが日本に戻ってきたあと何をやったかという、ほとんどの人々が官僚となって近代国家の体

制作りを担っていくと同時に、学校をつくって日本の若者たちに自ら得た知識を伝えていく。こういった動きを見せるわけです。

ただ大きな違いは専修学校、今の専修大学ですけども法学だけでなく経済学を教えるという、つまり経済科というものをつくったということが非常に大きな、ほかの学校にはない特色と言えるかと思えます。当時の東京大学にも慶応義塾にも「経済学」という一つの科目はありました。しかし「経済科」という形で、体系立てて経済学を学ぶことが出来たのは専修学校のみでした。それはやはり田尻、そして青木先生がおっしゃっていた駒井という二人のアメリカから帰ってきた新進気鋭の経済学者が専修学校には揃っていたということが大きいというふうに言えます。

もう少し補足しますと、東京大学では経済学は文学部で教えた、法学部で教えたりしているわけです。経済学部が出来るのは明治四一（一九〇八）年のことです。そのほか早稲田では、当時は東京専門学校と呼んでいましたが、「政治経済学科」を設置しています。経済学を政治学の一つとして教えたわけです。このように経済学という学問自体が一つの分野になりきることが出来なかった過渡期であったということも言えるかも知れません。

そういった意味では専修学校の他校にはない特色は、ある意味、田尻・駒井といった経済学・財政学を学んで帰ってきた人々がつくったと言ってもよいのかもしれないというふうに考えています。まさに「経済の専修」というわけです。

(青木)

かなり田尻稲次郎の青年時代の状況を三人の先生方にお話いただきました。そこで今少しこの辺の事情に深入りしてみたいと思います。

実は日本語で専門的な法学や経済学を教えるというのは簡単なようで大変難しい。つまり欧米の学術研究書を日本語に翻訳しなければならぬわけです。それがなぜ出来たのかという問題は、彼らを含めた私立学校の創立者の大半が武士階級の出身で士族であった。つまり江戸時代の後期につくられました藩校の出身者だったことと大きな関わりがあるように思われます。

彼らが幼少の頃から学んだのは漢学です。日本の場合、欧米の学問は漢文に翻訳されたものを導入する。「漢訳洋書」とも呼ばれた書物で学習します。幕末の多くの藩校は、蘭学や医学なども教育していましたのでそういったものを藩校では実際にテキストとして使っていました。それから私たちが日本語で使っている熟語の大半は漢語が凝縮された言葉でございます。漢学を学んだことが彼らの翻訳作業を可能にした。そう言えるのではないかと思います。

田尻稲次郎が実際に翻訳したものが会場の外のコーナーに置いてあります。これを読んでいただければおわかりいただけますが、非常に丁寧な翻訳をしています。しかもそのうえに自分の意見が必ず入っています。私の私見としてはこういうふうに思うと書いています。基本的には翻訳書なんですが、田尻稲次郎の学識がそのなかに

具体的に表現されていると言っていると思います。そういうことを成し得る学力があったのです。

それでその内容について、どういう財政学の立場から、どのように日本の財政運営に取り入れていこうとしたのか。松方正義の考え方も含めて、永江さんに専門的なお話をしていただきたいと思えます。

(永江)

はい、それでは田尻稲次郎が日本に紹介した理財学、財政学というものが当時のような内容を持っていたのかということでございますので少しご紹介します。

映画中にちよつとセリフとしては入っていましたが、田尻稲次郎の最も主要な初期の業績としてはフランス人財政学者のポリューという人の財政学、今青木先生がお持ちだったものに『ポリュー氏 財政学』というものがございまして。これはフランスの、今の位置づけとしては自由主義財政学と呼ばれている分野でございます。

少し今風の言い方をしますと、財政というものの基本的な考え方で、やはり大きな政府という考え方と小さな政府という考え方があるわけでございますが、当時のフランスの財政学はその区切りで言いますと小さな政府を志向していたんですね。この当時なぜ田尻稲次郎がフランスの財政学をアメリカで学んだのかということは非常に興味深い問題なんですが、一つは先ほど瀬戸口さんがおつ

しゃったように当時のアメリカの学問風土の問題があったのでしよう。つまりアメリカの大学院ないし大学で経済学を教えている教員のほとんどがヨーロッパへの留学経験がある人物だったので、ヨーロッパの学問がアメリカを経由して日本に入ってきたんだと、そういう考え方が一つはあり得るのかなと思います。

ただ田尻稲次郎がボリユーを学んだということになりますと、あまりにも符丁が多いと言いますか。田尻稲次郎の直接の帰国後の上司になる人物が先ほど言いましたように松方正義です。この方がもともとフランスに非常に見識の深い人物であったということなんです。松方正義はバリで行われた万国博覧会の見学というか視察を機に渡仏するわけでございますけど、そこで当時の古典派経済学の代表的な人物の一人でありましたレオン・セーという名前で知られる経済学者と親交を結びます。さらに田尻稲次郎が翻訳したボリユーとも面識があつたと言われているんです。

つまり当時の田尻稲次郎にとってみれば、日本に帰ったときの大蔵省の中心人物である松方正義はフランスの財政学に詳しい人物である。それを彼は留学時代におそらくは知っていたと思います。しかもこの時期の自由主義財政学というのは、その松方正義が行おうとしていた紙幣改革ですね、インフレをいかに抑制するか。それから当時は「明治十四年の政変」のきっかけとなりました官有物払下げの問題とも関わっていて、とにかく政府事業をどんどん民営化していこうという流れが存在していました。

そうした政府の課題と当時のフランス財政学というのは非常に相性が良かった。そうした本国の状況との兼ね合いで、最初は教授に勧められたものであったのかもしれないですが、今日も映画でございましたように駒井重格と必死で首っ引きで、駒井重格に至っては大学の卒業を諦めて翻訳に没頭する。そこまでボリユーの財政学の翻訳に熱中したのは、当時の日本の状況にとって必要な学問であるという強い確信があつたからだと私としては今の時点では考えているわけです。

実はもう少し先の話を言いますと、田尻稲次郎は、最初はボリユー流の自由主義財政学を日本に紹介した人物として知られているのですが、別の文献で日本における経済思想史で田尻稲次郎の名前を引くとドイツ歴史学派の日本への紹介者とも紹介されているんです。ドイツ歴史学派というのは当時プロイセン、プロシアの財政学で、これは逆にフランスとはある意味対極に位置する大きな政府の財政学であります。つまり軍国主義化を進めるプロシアにとって軍備を拡大していくかにイギリス・フランスと対抗していくかということ強く意識したプロシアの学問で、それは日清・日露戦争を戦っていくその後の日本にとってはまさに必要な財政学となっていくわけです。

ですから田尻稲次郎という方は非常に高度な実務家気質の人物であると私は考えている部分がありまして、イデオロギーが先にあるのではなくて、今の日本にとってどのような学問が必要とされている

るのかということを選択する能力に長けていた人物であつて、松方財政のときにはフランス流財政学が適している、日清・日露戦争期においてはプロシア流のドイツ歴史学派財政学が適している。その判断を誤らないセンスを持っていた人物ではないかと、そのように考えております。

(青木)

おわかりいただけただでしょうか。先ほど私が政府は条約改正、関税自主権の回復が急務だとお話しましたが、実は関税とは何かというようなことまで含めて一から学習しなければならなかったのが当時の日本の状況でございます。この『ポリユール氏 財政論 関税之部』というの、そういうことをものすごく意識して書かれている本です。条約改正を行うためには、こういう知識を知る必要がある、フランスではこうであるというふうに書かれています。永江先生が「自由主義財政学」とおっしゃいましたけど関税の観点から見るとその国の国内の産業資本を守る。そういう観点で色んな保護関税を付ける。現在でも日本はそれに近いようなことをやっています。が、そういうことを廃止し、自由な貿易をさせることで国家の経済を発展させて財政力をつけていこうと、こういう論理ですね。田尻はそういう考え方に非常に大きな影響を受けたんだらうと思えます。

そこでまた松方正義という人物がクローズアップされてくるんで

すが、この辺のところについて徳永さん、その後の松方について話をしてください。

(徳永)

はい。松方財政自体はまた専門の先生が話されると思いますけれども。まず一番簡単なところで田尻がどこで生まれたかということなんですけども。天神馬場で番地でございますと東千石町の一六〇番地というところになります。電車通りの天文館よりちよつとこっち側になるかと思ひます。

田尻稲次郎の生涯を顧りみまして、最も重要な点は行動理論があつたように思われます。田尻は場面に即して今自分は何をなすべきか、というのを考えの根幹に据えていたのではないのでしょうか。一二、三歳までは喘息と胃腸が悪いということで病弱であつた。ところが一五歳くらいになつたら健康になつた。鹿児島はあまり知られていませんが洋学、特に蘭学が非常に盛んなところ。そして、このこと自体も知られていませんが、足立梅溪という人のところに健康回復した稲次郎は入門してお医者さんにならうという、そういう動きが見られます。

そのあと先ほど青木先生のほうで話されましたように、健康を取り戻したら、自己の問題（医師）より国家の問題を考え、海軍に入らう、今、国家の急務は海軍だと、そこに至つたということです。ところが海軍志向も非常に多い。それで自分の場面を海外に求め法

学を志向したわけです。

先ほどのお話のように大学南校出身だけで五人、イエール大学留学生も五人ほど法学志向がいたと言われています。そのように留学生の多くが法学を志向したのに対して、どなたかあとで話されるんでしょうけど、財政学へと転向します。その財政学がなぜ大事かという、そういうところに変わっていています。それは直面するものは何か、非常に大事なものは何か、それに自分の志というものを向けていつているというふうに考えられます。

そういうことの背景として、もう一回また薩摩の土壌に返ってよろしいでしょうか。

田尻が外国に行つて勉強したいという、このことについてなんですけれども、やっぱり基本は斉彬にあるんじゃないかと思うんですね。斉彬の教育論というのはほとんど論文などには書かれてないんですが、非常に教育に熱心でした。例えば田尻は開成所というところに入ります。鹿児島の開成所というのは斉彬が非常に大事と考えた軍事兵学とか、陸軍兵学、測量、そういうもののうえにくるものとして語学とか哲学的な、非常に優れたものを置こうとしたんです。結果的には基礎教育みたいになつてしまふんですけれども、そういう教育制度のなかで斉彬が考えていたものがある。斉彬が実践したのは日本を代表する蘭学者を鹿児島に連れてくる。石河確太郎であったり川本幸民であったり。それから医者さんだったらたくさんの方が鹿児島に来ております。ジョン万次郎も英語教師とし

て、ネイティブというんですか、ほとんど原語に近い言葉が話せる人も連れてきて鹿児島教育機関の教育者にする。

そして薩摩藩士を日本全国の緒方洪庵塾とか江川担庵塾とか色んなところで学ばせています。先ほど申し上げました安田轍蔵という人物は大阪から江戸に出た眼科医です。そこにも弟子に入れて眼科を学ばせている。教育の基本に斉彬の考え方がるように思われます。

このような観点から明治政府という政府を見ますと、斉彬の政策をそのまま大久保が受け継いでいます。斉彬の場合は早く亡くなりますので、形として完全に出来上がったわけではありません。しかしお雇いがいて、薩摩藩士を全国に学ばせる、蘭学塾に学ばせる。そして日本の在来文化、職人文化という、例えば動力源で言えば水車を回す、事業で言えば集成館事業ですね。そういうものの職人文化というものと密着させる。それが近代国家の明治政府ということになりますと、全国の、世界の先進的な研究者を呼んでくる。そしてそのしたに日本の研究者を全国、世界に派遣して、色んなものを学ばせる。自分が学ぶことと、それから先進的な世界の学者が持っているものを受け取ることとで人材育成になる。

それから斉彬は急いでやらなくちゃいけないのは工業だけれども、しっかりやらなきゃいけないのは教育、人材育成だと言っています。それは大久保の明治維新政府にも受け継がれている。そうするとその流れというのは薩摩藩の藩閥としては、当然田尻にまで流

れてきていると言えるのではないでしょうか。

さらに斉彬の時代で、どうしても申し上げたいのは、幕府が嘉永六年（一八五三）のペリー来航を未曾有の国難だと言っていますけれども、あれは決して未曾有の国難ではない。なぜかと言いますと、その五年前に弘化三年（一八四六）ですけれども琉球開国問題という大変大きな問題が日本、そして薩摩藩には起こっている。ところが幕府には日本という意識がない。幕府にしても幕府を守る、ほかの藩にしても自分の藩を守ることだけです。ところが斉彬がそういうときにちゃんと「国家の守護はどうあるべきか」と言っています。国家観というものを持っている。国際社会に生きる国家観とは何かというときに、斉彬は二つの条件を出しているんですね。それは何かと言いますと、先ほどからお話が出ている不平等条約の問題なんですけど。いまだ条約の問題が出ないときに、すでに斉彬は幕府への上書で発言しています。何を発言してるのかということですけど、まず一つは産業を興すこと。これが急務であり、産業を興さなければ国家とは言えない。もう一つは軍力を備えなければ対等に相手との話が出来ないと言っています。

ですから幕府にお願いしたのは、とにかく大砲をつくる、艦船をつくる。そういう軍力を備えながら話し合いの場に臨まないと対等の条約は出来ないんだという、そういう考えを持っています。ただ斉彬の考えでは三年間の年限があれば何とかなるということですから、それは実現しませんでした。

薩摩の考え方というものは斉彬のそういう考え方からきているので教育制度にしても教育とは何かというような問題になる。薩摩の教育機関・開成所（斉彬死後に設立）で、田尻が学んだのは英語です。ですから英語を学ぶということはアメリカに行く、イギリスに行く、そういう根拠を持ったものであったらうと思うんですね。そして薩摩におけるその文化的な土壌というものは斉彬のときに大きく育まれて、それを大久保が受け継ぎ、そして直接的なのか断絶的なかわかりませんが松方に移っていく。そして田尻に行くという、そういう流れのなかで見ると、一つの薩摩藩の流れが見えてきます。

それから田尻における資質の問題ですね。今何が大事かということとを考えると、その人の受け取り方によって変わってくる。こういう形で出来たのかなというところを感じるところがあったので述べさせていただきました。ちょっと遡ったように申し訳ありません。以上です。

（青木）

薩摩の幕末の教育に対する考え方というのはこういうふうには始まって、それが次々と優れた人材を生み出していくんだという、大変大事なお話だったと思います。

その後、田尻たちは学校をつくって教育を始めました。しかし当時の日本にはまだ大学は一つしかありません。明治五年（一八七

二)に出された「学制」では、日本を八つの区域に分けて、八つの大学をつくる。そのしたに中学校をつくって、さらにそのしたに小学校をつくる。こういうピラミッド型の教育制度をつくって、国民すべてに教育を受けさせるということを考えたのです。ところがお金がないものですから大学はたった一つだけ東京につくった、それが東京大学なのです。

ところがそれでは十分な人材が養成が出来ない。さらに「明治十四年の政変」以後、自由民権運動など様々な運動が起こってきて国会の開設、憲法の制定という動きになるわけです。ますます有益な人材が多数必要になるわけです。しかしどのようにして人材を育成していくのか。

そこで専修学校をはじめ明治法律学校(明治大学)、東京法学校(法政大学)、それから東京専門学校(早稲田大学)、英吉利法律学校(中央大学)などが出来てくる。こうした専門学校はこのときどういった教育を行おうとしていたのか。また鹿児島から長崎から熊本からどうやって、将来自分はこうなりたいと考えている優れた青年たちを受け入れていこうとしたのか。その辺のところはとても大事な問題です。どうやって高度な知識と見識を持った専門家を多数養成していこうとしたのかということについて、少し専修学校を中心にして瀬戸口さんからお話していただこうと思います。

(瀬戸口)

それでは少し明治初期の高等教育機関のあり方や、教育内容といった点についてお話ししたいと思います。先ほども申し上げましたが、明治初期、大学といえば東京大学を指します。東京大学は明治一〇年(一八七七)に出来るんですけども、今でもそうですが、この大学に入れる人々というのは限られています。当時の東京大学に入るためには、まず語学が出来なければいけませんでした。語学とは英語・フランス語・ドイツ語ということになります。なぜなら教員は外国人で、彼らが母国語で授業を行っていたからです。そのため東京には語学を教える学校が次々につくられます。いわゆる東京大学に行くための予備校みたいなものが出来るわけです。それくらい当時、大学に行くというのは語学が必要とされていたという事実があったわけです。

こういった語学教育というのは後に旧制高校の教育方法にも繋がっていきます。旧制高校のクラス分けは選択した語学で行われます。甲が英語、乙がドイツ語、丙がフランス語というようにです。

では一方、私立学校ではどうだったのかというと私立学校の場合、基本的には試験というものはほとんどなかったというふうに言われています。もちろん簡単な試験はあるんですが、一般的に言う当時の中学校を出たくらいであれば、ほとんどの人間が入れました。それは一つには私立学校が大学、つまり東京大学に入ることは出来ない、または語学は出来ないけれども、もつと専門的な知識を

身に付けたという若者たちの受け皿になることを望んでいたからです。ですから学びたいという人間は基本的には受け入れるという姿勢を打ち出す。その代わり受け入れた後は厳しい試験を行っていくわけですから、例えば専修学校の卒業率として実は二〇%にも満たないというような状況が生まれます。

退学の理由についてはもちろん学力という問題だけでなく、金銭的な問題もありますけども、専修大学に限らず多くの私立学校の卒業率というのは、だいたい二〇%くらいから三〇%くらいだったと言われています。そういった意味では当時の高等教育機関に進学して、そして卒業するということがいかに難しかったのかということと言えると思います。

それから当時の私立学校の生徒には、西日本の人々、特に九州人が多かったようです。それはやはり明治維新の原動力となった藩が西日本に多かったこと、そして福沢、大隈といった九州出身者が学校をつくったことがその要因と言えます。地元の人々がたくさんいるからという理由で、大分の間は慶応に、佐賀の間は早稲田に入学するというように、創立者の出身地の人間がそこに集まるといような状況が当時の学生名簿から見て取れます。

専修大学も同様で、当時の名簿を見ると現在の東京都や神奈川県出身というのはほとんどいません。その多くは地方出身者でした。よく「笈を負って」という言葉を使いますが、まさに地方出身者が立身出世をめざして上京し、その後の進路を求めていくということ

になるわけです。

では、学校で何を学ぶのかというお話がありました。それはもちろん私立学校によって様々です。早稲田というのは大隈重信が「明治十四年の政変」によって下野したのちに、近代国家を担う政治家をつくることを目的として設立しました。ですから現在でも早稲田と言えば「政経」が一番偏差値が高いわけです。一方、慶応はもとも英学塾から始まっていますので英語教育を主にしながらも、どちらかというと実業家を育てていくことに主眼を置きました。そのため卒業生は三井・三菱といったような、いわゆる後の財閥に繋がる企業に就職していく人間が多かったわけです。

そのほかでは専修大学を含めた明治・中央・法政・早稲田といった当時「五大法律学校」と呼ばれた法律学校は当時の自由民権といった運動の高まりのなかで、先ほど青木先生からりましたが議会の開設や憲法の制定といった動きに対して、対応出来る人材を育てる必要があるということで、法学教育を行い、数多くの弁護士を生み出していきました。

修業年限の話をしみますと、東京大学は卒業までに最低でも五年から六年はかかりました。というのも最初の一、二年をほとんど語学教育に費やすからです。それはもちろんその後の専門教育を外国人教師が外国語で行うためです。そのため東京大学では短期間で人材を育成することが出来ないんですね。

しかし私立学校は違います。二年または三年といった短い期間で

卒業出来る。それは日本人教師が日本語で専門的な知識を生徒に教えるから可能なわけです。日本語で教えるということはこのようなメリットがある。そして即戦力となる人材を短期間で育成し、優秀な人材を世に送り出したのです。

しかし私立学校を出て国家に奉職するといっても、東京大学出身者たちとは大きな違いがあります。現在、国家公務員は一種、二種という形に分かれています。やはり当時も私立学校出身者は現在で言う二種に、東京大学出身者は一種に行くというような形である種住み分けがなされていました。

それでも政府という組織が巨大化し、官僚制度がつくり上げられていくと、東大出身者だけでは国家運営は出来ないという状況が生まれます。私立学校が世に送り出した大量の卒業生たちは、官僚として国家運営の一旦を担う、または地方の教員として働く、在野の弁護士として活躍する。このような人々を生み出すことで私立学校は大きな役割を果たすのです。

また数少ない東京大学出身者の多くは大学教育や官僚として中央に残るのに対して、私立学校の卒業生たちは全国に散っていきまます。地方出身者が中央の私立学校で学んで卒業した後、地方に戻ってその地域の発展に貢献していくような状況も見取れます。この点でも明治期の私立学校が、そうした人材を育成していたという意味で国家や地域に対して果たした役割は非常に大きかったということが言えるのではないでしょうか。

(青木)

今の話に補足しますと、多くの専門学校が東京にございました。

ほかの大阪とかそのほかの都市にはあまり出来てないですね。関西法律学校、現在の関西大学は明治十九年（一八八六）に出来ていますので、早い方ですが、東京に比べると数少ないわけです。ですからそこで学ばなければならないというときに一番必要なのは経済力なのです。経済力がある方のご子息は当然東京に出てきて学習出来ますけれども、そうではない場合はどうするのか。今日はこの会場の外に教科書を展示してありますがそのなかに、通信教育用の教科書が混っております。要するに鹿児島で学びたいという若者がいた場合には、通信教育で学ぶ方法があったのです。こうした方法をそれぞれの専門学校が持っていました。そして通信教育を受けた学生を「校友」として卒業を認めていく方式を取っていたのです。ですから色んな意味で専門学校が果たした役割は非常に大きいわけです。

明治十九年に東京大学が帝国大学と名前を代えます。その理由として、先ほど瀬戸口さんから話がありましたように、いよいよ日本が憲法を制定して議会をつくる。それに合わせて様々な法律、例えば民法や刑法などを憲法に合わせてつくらなければならないという問題に全部関わっていくわけです。そのときに必要な人材をどのように育成していくのか。それから法律だけではありません。近代国家をつくっていくためには先ほど瀬戸口さんが述べられたように、

工業とか医学とか法学とか経済学とか、それ以外にも色々な専門的な知識を持った専門家も育てなければならぬという問題が出てまいります。そういった人材を養成するために専修・法政・明治・早稲田・中央という五つの学校、当時「五大法律学校」と呼ばれたこれらの学校を帝国大学の管轄下において高等文官を含めた国家を支える人材、今でいう官僚を養成していく教育システムをつくり上げようとしたわけです。

しかし私立学校を国家的な教育システムに組み込み、学生を集めるためにはある程度特典を与えなければいけないわけです。つまり卒業したら一定の簡単な試験を受けて役人として登用するというのがその一つです。東京大学を出ればそのまま官僚になれるんですけど、専門学校の場合はそうではない。もう一つの特典は徴兵制度、つまり徴兵を免除するというものです。そういう特典を付けてまで人材を集め、育成していかなければならぬ。そのような教育は明治国家が発展していくためにどうしても必要なことだったので。

では、このような教育を実際に行なった専門学校の先生方、専修学校には田尻稲次郎を含めて多くの教員がいたわけですが、彼らの給料はどうだったのですか。大蔵省の役人しながら実際にやるわけですから、夜間の教育になるわけですけども、瀬戸口さんからその辺のところをちょっとお願いします。

(瀬戸口)

当時の私立学校の教員の多くは、私立学校の教員として生計を立てていたわけではありません。ほとんどが昼間は官僚として働いている。それから東大などの官立学校で教員をしている。当時は司法省法学校、今はもうないんですけど、そうしたところや一橋大学、高校などの官立学校の教員を兼任している人がほとんどでした。

そのため私立学校、例えば専修学校を例に挙げると、専修学校で働いている教員というのは基本的には給料はありません。教員は無報酬で働くわけです。そうした学校は別に専修学校だけではなく、当時の明治や中央もそうです。それから東京理科大学などもそうです。教員は生業を持っているので、私立学校では無報酬として働けたわけです。

今日『学校をつくろう』で観た方もおられると思うんですけど、専修大学創立者たちは、自分たちの知識を若者たちに伝えたいという想いで学校をつくります。しかし彼らは昼間は自分たちの仕事がある。そのために夜間に授業を行う学校にしたわけです。当時の私立学校の多くは夜間学校です。つまり多くの私立学校の教員が昼間は仕事をしているからなんです。ですから夜間学校というのは昼間働いている若者たちが通えるようにという理由もありますが、何より教員が夜しか教えられなかったからという理由があったのです。

(青木)

こういう訳でございまして、専門学校の教員は官僚として実務を実際に行いながら、その成果を教育内容に含めて学生たちに伝えていきます。田尻稲次郎が教えていたのは専修学校だけではありません。早稲田、当時の東京専門学校や東京帝国大学でも教えています。

そのほか当時の学校制度のお話を少しさせていただくと、明治五年（一八七二）の「学制」では大学のしたには中学・小学しかなかったわけです。しかしこれでは人材養成が出来ないので国家も様々な専門学校をつくっております。工業関係や司法関係、それから医学関係の学校もつくっております。さらに商業関係の学校なども含めて学校をつくったときに高等中学校というものもつくりました。この高等中学校が明治二〇年代の後半に高等学校と改称され、後に旧制高校と呼ばれる一高から五高となったわけです。東京に第一、仙台に第二、京都に第三といった形でつくりました。

このとき、政府は高等商業学校という専門学校もつくりまします。経済が発展していくとどうしても簿記や会計などが必要となつてきますので、そういうことが出来る人材の養成を始めました。それに応えて東京に高等商業学校、現在の一橋大学がつけられ、そこに駒井が赴任し、駒井の要請で田尻稲次郎も授業を行っていました。では忙しくなったらどうなるのか。その辺どうですか、田尻は忙しい場合はどうやって教えていたのですか。

(瀬戸口)

そうですね、基本的に専修学校では月曜日から金曜日まで授業をやっていましたが、田尻は忙しいので平日には来れない。そういうときは日曜日の昼間に今で言うゼミみたいな形で討論会みたいなものを行う。そういうことを創立者である田尻や相馬が行うわけです。結局、彼らは無給で働いているわけですが、休日にも授業を行います。結局、彼らは無給で働いているわけですが、休日にも授業を行います。結局、彼らは無給で働いているわけですが、休日にも授業を行います。

当時の学生の思い出話には常に田尻の話が出てきます。経済科の学生でも法律科の学生でもです。それを読むと法律とか経済とか関係なく学生たちはどの先生とも仲良く接していたみたいです。それは今言ったように授業以外、例えば日曜日のそういった時間とかがあつたからこそ、学生と教員が非常に近しくなれたんじゃないかというふうに考えられます。

(青木)

田尻は教育というのは非常に大事なのだという、これだけは人間として大切なんだと認識して、ずっと生涯教育から離れなかった人物です。そして途中、大蔵省の官僚から次に何に転身するのかと言いますと、今日展示を覗いていただいた方はわかると思いますが会計検査院の院長に代わります。新しい仕事を始めていくわけです。その辺について少し永江さんからお話いただけますか。

(永江)

はい。それでは会計検査院について少しお話させていただきま
す。この展示には三体の田尻像が展示されておりまして、そのうち
の二体が会計検査院の院長時代の像だと言われております。会計検
査院と言いますとどうしても一般になじみの薄い官庁であるかもしれ
ませんが、日本の財政上では非常に重要な役割を果たしている官
庁でございます。今、新聞のニュースでは例えばオリンピックですと
か企業の監査を巡る問題が非常に話題になっておりますが、一言で
言えば国家財政の監査を行う役所です。一般的に考えますと当時の
大蔵省、現在の財務省という日本の官僚制度のなかでも頂点に位置
する人々が、彼ら自身がつくった財政運営を外的にチェックするの
は非常に難しいわけです。しかしそれをやらなければ大蔵省官僚が
国家財政を欲しのままにしてしまうリスクが存在するので、近代国
家をつくるためにはチェック機関をつくらなければなりません。そう
いった理由で明治一三年（一八八〇）に大蔵省から分離・独立する
形で会計検査院というものがつくられます。さらに明治二二年に会
計検査法という法律がつくられまして、国務大臣から独立した部
署として当時は「天皇直隸」と呼ばれました。つまり会計検査院の
院長を総理大臣が気に食わないから首にするとか、そういうことが
出来ないようにある意味、天皇直属の部署として国家財政を天皇に
申し上げる。そのような部局として会計検査院というものをつくっ
たわけです。そのような機関に大蔵省の代表的な人物であった田尻

稲次郎が院長に就くことによつて、国家財政のチェック機関を強化
していくというのが田尻稲次郎の大きく言つて二つ目の仕事である
ということになります。大蔵省官僚・専修大学の経営者、三つ目で
しょうか。

田尻稲次郎は最終的に爵位は子爵でございましたが、男爵位を授
与されたのが日清戦争時の戦費調達に関わる実務を評価されてのこ
とでございます。次の子爵の授与を受けたのがこの会計検査院長時
代でございます。日露戦争における特別会計の管理。日本の軍費
調達が適切に行われているかどうかということに関して、通常業務
と並行して非常に厳しい激務をこなされ、その業績を評価されて子
爵位を授与されたというふうに伝わっております。

ちよつと雑談じみて言いますと、会計検査院というものが最近話
題に上つたのが万城目学氏という小説家がおられまして、『プリン
セストヨトミ』というこの前映画化されましたけど、珍しく会計検
査院が注目を浴びた小説で非常に面白かったので関心のある方はご
一読されてください。

(青木)

今回の田尻稲次郎展の開催に当たつて、会計検査院から多大な協
力をいただきました。私たちから見ると非常に堅い官庁が後援に
名前を連ねてくださった。なぜなのか。これは田尻稲次郎が会計検
査院の歴史のなかで非常に重要な人物だったからに他なりません。

その辺のところを瀬戸口さんでしょうか。会計検査院にお願いに行かれて色々あったでしょう。

(瀬戸口)

今回この展示の専修大学側の担当者として会計検査院に何回かお邪魔させていただきました。そして会計検査院に後援をお願いした際も快くご了承いただきました。後で聞くと、こういった展示に後援するのは初めてのことだったそうです。こちらとしては財務省や農水省などの省庁が展示の後援をやっていたらいいので、会計検査院も同じようにこれまでも後援や協賛に名を連ねたことがあるだろうと勝手に思っていたのですね。

なぜこれまで後援をやったことがなかったのか。会計検査院というのは、先ほど永江先生からお話がありましたように、国家財政がきちんと使われているかどうかをチェックする機関なわけです。例えば専修大学のような私立大学にも補助金という形で国家財政が入ってきています。黎明館も公的な機関です。そういったところから後援をするというのはなかなか難しいところがあるものですから、今までやったことがないというお話でした。

しかし今回、田尻稲次郎展には大変な協力をしていただいた。今回三体の田尻像を展示していますけれども、そのうちの一体は会計検査院からお借りしたものです。職員がお金を出し合って胸像をつくって院長に送ろうという動きがなされたのは歴代院長のなかで

田尻一人だそうです。それほど田尻稲次郎は会計検査院の職員から非常に慕われていたわけです。というのも田尻の時代というのは会計検査院自体が非常に困難な時代でした。

先ほど永江先生からお話があったように、田尻院長時代というのは日清・日露・第一次世界大戦という大きな戦争に直面し、莫大な軍事費を調達しなければならぬ時期でした。軍事費を調達するということは、そのほかの部分の切り詰めることとなります。会計検査院自体も実は人数が減らされるなど縮小されます。しかし今言ったように軍事費がちゃんと使われているかどうかというチェックもしなければならぬわけです。これを少なくとも人数で、しかも通常業務以外でやらなきゃいけないわけです。それまでにはない仕事量になる。そういったなかで田尻自身が院長として自ら先頭に立って、人数は減らされたが、その代わり職員の身分や給料を上げたり、色んな部分で職員の待遇に気を配っていた。そういった点が田尻が職員に慕われた理由ではないかというふうに思われます。

現在、会計検査院の院長は国務大臣と同等の地位にあります。当時の官僚は親任官と判任官に分かれています。その違いは現在の国家試験一種と二種というふうに考えてもらっていいと思いますが、院長という職は親任官の一番上のクラスになるわけです。田尻が院長になった当初は違います。その途中で大臣と同等のクラスの職と見なされるようになるわけです。それほど田尻が院長時代の軍事費問題に会計検査院が果たした役割が大きかったということになる

わけです。田尻はこの功績で爵位を与えられています。

(青木)

田尻稲次郎という人物は会計検査院長として明治天皇や大正天皇に検査報告をしに行くわけですよ。そのときどんな服装で行ったのでしょうか。人力車は使わない。車は大嫌いなので公用車を使わずに歩いて行く、服装は映画に出てくるように着たきりである。

田尻稲次郎の別号は「北雷」と言うんだそうですが、これは「ホクリイ」と呼んで駄目なそいで「キタナリ」と読むんだそうです。「着たきり雀」と言われるほど服装に無頓着な人物です。

ですから天皇にお目にかかるときどうしたのかということにも当然関心を持つわけですが、こうしたことも展示を覗いていただければわかると思います。そこでそういう考え方の根底に何があるのかということですね。教育者でありトップクラスの官僚である。こういう人物がどうしてそういう思想、生き方を貫徹していたのか。ということについて、その背景について考えてみたいと思います。

だからこそこんな人物を世に出したんだということになるのかもしれないませんが、実は私が一番最初に話した大原幽学という近世後期から幕末にかけて活躍した農村改良運動の思想家として、そして実践者として著名な人物を最初に発見して世に出したのは、田尻がその著作集を刊行したことがきっかけなのですね。なぜ大原幽学なのか、そして大原幽学のどこにそんなに惚れ込んだのかということに

ついて、これから瀬戸口さんにお話をさせていただきたいと思いません。

(瀬戸口)

大原幽学という人物なんですけど、あまり皆さんご存じではないかと思えます。簡単にご説明すると、大原幽学とは江戸時代後期、生まれは寛政九年（一七九七）、つまり約一八〇〇年頃に生まれた人物です。実はその出生というのはいまはつきりしていません。一説には尾張藩の家老に大道寺家というお家があるんですけれども、その生まれではないかというふうにも言われています。一つはつきりしていることは、もともとは武士として生まれた人間だということですよ。

大原幽学という人物は一言でいうと農政学者または農村指導者ということになります。長野県小諸辺り、千葉の房総といった地域を中心に農村改良運動を指導した人物です。学問と生活の一体化、それから経済と道德の調和が彼のモットーでした。田尻稲次郎の生涯を振り返ってみると、今言いました学問と生活の調和、それから経済と道德が調和するといった幽学の主張、おそらく田尻はこういった部分に惹かれていったのでないかというふうに思います。

大原幽学の業績としては一般によく言われるのが農業組合を初めてつくったこと、また農地改革を行ったことです。今私たちは田圃が短冊状に仕切られていることを当たり前のように思ってしまうか

も知れませんが、それは近代になって農地改革を行った結果、こういった短冊状の田圃が出来たわけです。実は江戸時代はそうではありませんでした。しかし大原幽学は江戸時代にそういったことを行ったとして評価されています。その跡は千葉県旭市に残っておりまして、国の指定史跡になっています。つまりそれほど江戸時代に例のない耕地整理だということでも史跡になっているわけです。

このように大原幽学自体、様々な功績を残した人物なんですが、江戸時代後期の農政学者・農村指導者として最も有名な人物として、最初に青木先生がおっしゃった通り、やはり皆さんが一番よく知っているのは二宮尊徳という人物だと思います。あともう一人挙げるとすれば大蔵永常という人物もいるんですけども、これは今の愛知県の田原藩というところで同じように農村指導を行った人物です。同時代の人間では今言った大原・二宮それから大蔵とこの三人が非常に有名です。

ですがこの三人の大きな違いは明治期になってどのように世間に取り上げられたかということになります。皆さんが二宮尊徳をなぜ知っているのか。それは二宮尊徳が薪を背負って歩く姿の銅像を見ているからでしょう。戦前まで多くの小学校にはこの像がありました。こういった像がつけられたのは江戸時代ではなくて明治になってからのことです。さらに国定教科書にその名前が出てくるのは、明治の半ば頃、明治の三〇年代になります。このように校庭に、そして教科書に二宮尊徳が登場するようになったのには訳があります。

す。当然国家政策の一つとして二宮尊徳像がつけられていくわけです。国家に対して献身的に奉公する、そうした国民の姿を二宮尊徳に託して、国民はこうあるべきだとして国家が二宮尊徳というものを一般の人々に浸透させていく。それは今言ったように日清・日露それから第一次世界大戦が起こって、国家財政が厳しい状況なかで、国家は軍事費調達を目的に国民に対して多くの負担を強いていくわけです。しかし国民は二宮尊徳のように自ら国家に献身・奉公するべきだと説いたのです。

ここからはあくまでも仮説ですが、現在の私の考えをちょっとお話しさせてもらいます。こうした二宮尊徳像を全面に押し出すのは、山県有朋を中心とした長州閥です。山県有朋が自分たち長州系の官僚を使って二宮尊徳の姿を国民に対して浸透させていくわけです。

一方、田尻は薩摩閥の官僚ということになります。そうしたなかで田尻稲次郎がこの大原幽学という人物を二宮尊徳ではなくて、当時無名であった大原幽学という人物を取り上げていく背景というのは、一つはそういった側面が考えられるのではないかとというふうに考えています。

今言ったように尊徳が国定教科書に載るのが明治三十七年（一九〇四）、そして田尻が大原幽学を世に出すのが明治四四年です。そういった意味では二宮尊徳、大原幽学も同じ時期に広められていくことになります。お配りしたパンフレットの八ページに大原幽学『幽学全書』という写真を載せてあります。これが田尻稲次郎が編集し

た『幽学全書』なんですけども、幽学の教えや著作物をまとめたものです。これによって大原幽学という名前が全国区になっていくわけです。そのしたのほうに付けているのは『幽学全書』を刊行したときに書いたもので、自分は大原幽学の後進者である、大原幽学の教えを引き継ぐ者であるということを述べています。こういった形で田尻の全面的なバックアップをもとに大原幽学という人物が広められていく。なぜ尊徳ではなく幽学だったのか、この問題はこのような観点から見ることが出来るのではないかとというふうに考えております。

(青木)

現在では先ほど話がありました千葉県旭市に大原幽学記念館がございます。今でも幽学を顕彰する運動が行われており、ここでは田尻稲次郎が大変な人物として高く評価されているとのこと。そこで同じような観点で永江さんの方からお話があるそうです。どうぞ。

(永江)

すみません、ちょっと喋りたくりました。この田尻のエピソードと今日の映画を拝見していて、見落としていたなと思う点が一点あります。彼が若年時においてハートフォードという場所で、ケプロンというキリスト教系の神父から就学の援助を得て、その後もそ

の教会の援助を得て就学を続けていくという話があったわけです。

その映画のなかでその教会の支援者たちにお礼を言うシーンがございましたよね。そういった彼の経験が帰国後の田尻稲次郎にどういった影響を与えていたのだろうかと考えたときに、実際、田尻稲次郎がなぜ大原幽学に注目したのかということをお話を昨晩パネリストの先生方と話していたときに出たのが、やはりアメリカのキリスト教のプロテスタントイズムというものが、そういった農村部における、僕ら若い頃はマックスウェーバーの『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』という本を読むことが多くて、そのフランクリンをはじめとするアメリカのプロテスタントがいかにして資本主義の精神を育んでいくのか、むしろそれは節約と敬けんな精神から資本主義が生まれてくるんだと、そういう内容であったわけです。例えば新渡戸稲造は、日本にはそれに匹敵する形で武士道という精神があるんだということも言ったりするわけですけども、おそらく田尻はキリスト教に帰依することはなかったわけですが、帰国後キリスト教文化に匹敵する日本の精神文化を探す気持ちになるということがあったのではないかと。ちょっとそういうことを考えた次第です。

(青木)

さらに教育者であるということは、ただ学生諸君を教えるだけではありません。教えた学生諸君のなかから新しい人材が次々と生ま

れてくるわけです。そして次に田尻稲次郎と同じレベルで日本の国家に大きな貢献をする人たちが出てまいります。そのような観点で少し田尻が育て上げた人材について永江さんからお話いただけますか。

(永江)

はい。田尻稲次郎は大蔵省の上役として、それから東京帝国大学の教師として、実務において、そして教壇において様々な方々に影響を与えています。例えば専修大学における理財学の講義を受けた人物として非常に有名なのが二葉亭四迷という文学者です。彼は商科大学、当時の一橋大学の聴講生であつたわけですが理財学を学ぶためには今は田尻先生に教わらなければならないというわけで、校外生の形で専修大学の授業を受講して理財学を学んだ。最終的には文学者になるわけですがそういう経緯もあつたわけです。

さらに東大時代の教え子として非常に有名なのが阪谷芳郎と言います。まして、渋沢栄一の娘婿にあたりますし、大蔵大臣の経験も長く、日本の税制改革において非常に重要な役割を果たした人物であります。

また直接の教え子ではないのですが、大蔵省の下僚として非常に田尻の薫陶を受けた人物として若槻礼次郎がいます。そもそも私が田尻稲次郎という名前を初めて見たのが、若槻礼次郎の自伝に『古風庵回顧録』という作品がありまして、もともと私は昭和の経済史

を研究していましたもので、金融恐慌ですとか昭和恐慌といったところを勉強していく過程で若槻礼次郎に関心があつて、彼の自伝を読みました。若槻礼次郎は大蔵省から総理大臣になった人物で、そこで若槻の上司役として田尻稲次郎や駒井重格の名前が出てきておりました。それで奉職してから専修大学と関わりの深い方だったんだと知つたわけですけれども。なかなか上役としては面白い人だったようで様々なエピソードが残っております。

例えば大蔵省の人間、官庁というのは東京大学の首席や、二、三番という成績の人間を大蔵省に来るのか外務省に来るのか法務省に来るのか取り合いをするらしいんですけれども、田尻という人はあまり積極的に引つ張るといふようなことはしていません。ただ同年代の若い職員たちに君たちの先輩後輩の筋で優秀なのは誰だと、君たちが言うのなら採用しようといふようなことを同僚の水町袈裟六という人に話を振って採用しようです。自分のお陰で採用したんだといふ手柄顔は一切しないで知らん顔して採用してくれたといふような話があつたりします。

阪谷芳郎についても同様に陰に陽に様々なサポートをしていたといふような話が伝わっております。

(青木)

話がだいぶ進んでまいりました。そしてだいたい田尻稲次郎の生涯の後半の部分まではこんな人物だったということがわかりたい

だけたかと思えます。

そして彼は会計検査院を退職したあと東京市長に就任します。大正七年（一九一八）のことです。実はその頃の東京市政は大混乱を起こしていました。次の市長を選ぶために色んな派閥が争っている。そういう状況でした。このときに白羽の矢が立ったのが田尻稲次郎でした。そこで皆さんもご存じの米騒動に直面するわけです。それを乗り切ったときの市長として名が残っているわけです。

また会計検査院長時代には様々なエピソードが残されております。登院最初の日、歩いて玄関から入ると守衛さんに捕まって「お前何者だ」と言われる。田尻は困ってしまっという人物ですと言ったら、その守衛さんがびくりして慌てて案内してくれたそうです。それぐらい風貌や行動が官僚っぽくなく、学者っぽくもない人物だったようです。なぜそうなのか。これは映画にも出てくるように若いときからそうなのです。その辺のところを薩摩の風土と関係があるのではないかと思うのですが徳永さんいかがですか。

（徳永）

鹿児島の開成所を出たあと長崎遊学がございまして、それから江戸遊学がございまして。そのときに福沢諭吉のもとに入門するわけですけれども。それが自分の意と違って退塾するという状況になりました。そのときにはちゃんと礼を尽くして去ることになりますけれども、そのときは慶応義塾というのは英語の大変重要なところだと

いう認識で行っているわけですよ。ですから潔く去るときに礼を尽くしているというエピソードを見た際に、関が原の合戦を若干思い出しました。

関が原の合戦に至るまでは薩摩の場合は、島津は軍団制で義久軍、義弘軍、家久軍という軍団制になっており、義弘軍が戦ったことになるわけです。そのため島津氏自体の責任は徳川家から問われなかったということになりますが、そのときも家康の本陣の前を通るときはちゃんと礼を尽くして後で今までの経過をお話し申し上げますといった形で去ってるんですね。そういう礼儀正しさがちゃんとあるような気がします。

あと今度はもう一つの面なんですけれども、それ以降アメリカへ行って法学、特に万国法を学ぼうとします。でも留学生の多くが学んでいるから自分がやるべきは経済・財政だということで、そちらのほうに転向したということです。そのあと日本に帰ってきたときに、ここは私の専門ではないのでわかりませんが、福沢諭吉に恩義を受けて福沢諭吉の推薦で大蔵省に入ったにも関わらず、福沢の経済論に対する自分の学問的対立というんですか、ちゃんと自分の意見を、はっきりした姿で出しているところがまたすごいなと思うんですよね。お世話になったことと国家が今何を求めているか、何をなすべきかというところの筋がはっきりしている。こういうのが薩摩の気質であってほしいという、それが言えます。

それからもう一つ、政府が貢進生制度を打ち出します。大きな藩

からは三人、小さな藩からは一人を海外に派遣する制度ですが、田尻は薩摩藩から誰が良いかと尋ねられた際に、自分の名前は挙げずに三人の優秀な人物の名前を挙げている。非常に謙虚で素晴らしきと思います。

しかし三人挙げたなかの一人である赤星弥之助が外されて、逆に自分が推薦されるという結果になります。こういった場合潔く自分は去ったほうがいいのか、あるいは自分を推薦した人がいる以上、自分がやるべきか、どちらが良いのかを考える気質というんですかね。それは薩摩の土壤にあるものなのか、あるいはご本人だけの気質の問題かなというところもちょっと含めて興味深い事例ではないでしょうか。

話を戻すと先輩で偉大な福沢の経済論に対して、田尻は学問的観点からも国家が今何をなすべきかという観点からはつきりと対立姿勢を打ち出しているようなところが色んな伝記なんかから見えます。ですが、またこれについて教えていただければと思います。以上です。

(青木)

今のお話を私なりに解釈しますと、自分がいかに生きるべきか。今何をなすべきか。それが人生の課題ですからそれ以外は関心が無い。風貌なんかどうでもいい。健康であって大学で教え、官僚として仕事が出来ればよい。両方を実践するためにはそういう生き方し

か出来ない。それが一番大事なんだと考えて実践してきたのではなか、という感じを持ちました。

これでだいたい彼の人生観についてお話をいただいたわけですが、この辺でも少し時間がありますので今日三人の先生からお話を聞いたことをベースにして何かご意見があればいただきたいと思えます。どうぞお手を挙げてください。名前を言っていたければ結構でございます。これは記録として『専修大学史紀要』に載せたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

(久米)

貴重なお話ありがとうございました。私は鹿児島の私立高校・樟南高校というところの教員をしております久米と申します。専修大学の校舎は新宿から小田急線に乗ったところにあるということも知ってましたし、経済学の面では非常に素晴らしい権威を持った大学と知ってました。また私立大学の創立者は、早稲田の大隈重信とか慶応大学の福沢諭吉とか知っていたんですけども、専修大学の創立者はこの写真を見てS M A Pの中居君の写真かなと思ったくらいに格好いい創立者なんだなという思いがしました。

ちょっと冗談を含めて話をしましたけど、実は私の研究と言いますか、知りたいことの一つに鹿児島における自由民権運動があります。今回お話のなかに開成所という名前が出てきましたが、慶応三年(一八六七)から明治元年(一八六八)までの間、寺島宗則が教

授をしていたときに、田尻稲次郎という名前と鮫島武之助という名前が出てくるんですよ。

田尻稲次郎は当時から開明的なことを沸々と学んでいた。十代後半の多感な頃ですから、幕末にイギリスに留学した人物たちから、色んな意味で国際的な視野を持たされ、特に財政とかそういう道にもう自分に行くんだと考えていたのではないのか。そういうことについて先生方はどう思っているのか。

また当然ここに出てくる寺島がイギリスとの自由貿易との関係でクレランドンとか、そういう人物たちと交友的な関係を持っておりますので、実際にそういうところからも稲次郎自身がそういう意味で将来的に大学を創設するというようなそういう夢を持ったのではないか。そういう側面を含めて、鹿児島県の気質とかそういうのを絡めてご意見をいただけたらと思います。ただこれだけの質問が聞きたくてシンポジウムに参加したというわけですのでよろしくお願ひいたします。以上です。

(青木)

大変大事なご質問で、徳永さんいかがですか。

(徳永)

先ほども申し上げましたように開成所は元治元年（一八六四）、斉彬の考えにより設置されます。そこで学ぶ学問というのは、いわ

ゆる洋学が中心で、典型的なものでは医学など、そして幕末の頃になりますと軍事が中心になります。しかし鹿児島の場合は軍事だけではなくて、語学を中心に学びます。

開成所には、先ほど申し上げましたようにジョン万次郎を呼んできたりとか、当時の一流の学者を呼んでくる。斉彬がめざしたものは英学、英語の修得です。斉彬は開成所を設置する前に西洋通詞というのを設けようとしています。薩摩藩の場合は他の藩に全然見られない唐通事というものも見られません。それから朝鮮通詞というものも見られます。そして斉彬の時代に西洋通詞は蘭学通詞から英通詞に変わります。そういう意味でも薩摩藩というのは語学を非常に大事にしています。

唐通事とは何かと言うと簡潔には答えにくいんですけど、各地域の港には唐通事があります。そして鹿児島城下に唐通事を育成する塾があります。そして石塚崔高みために優秀なのは、いきなり江戸に出て勉強します。それから藩としては年間二、三人ずつ長崎で勉強させ、後進を育成させるために鹿児島に戻します。

朝鮮通詞は幕府の命令を受けて、苗代川という地域において藩の保護のもとに育成されました。表向きは漂流した朝鮮の船、あるいは朝鮮の漂流民を救うために必要とされたものですが、薩摩藩では莫大な藩費や歳月をかけて人材を育てました。さらに自分稽古、稽古通詞、通詞稽古、本通詞という職階まで設けています。しかし幕府が命じたからそれを頑なに守るんだらうかという疑問がわくんで

すけども、あとは行間を読んでいただければと思います。

つまり朝鮮からやってきた船、あるいは長崎での貿易統制が始まると、余計な船や余分な船は追い返されますが、その際に追い返された船はすぐに自分の国へ帰ったのでしょうか。出来れば南に下ってきて貿易をしたい。そういうふうなことが行間から読めるのかなと思います。

我々は昔、学校では、長崎一港が貿易港だと習いました。実は教科書でそのように書かれているだけでいわゆる「鎖国令」という言葉自体は法令にはないんです。しかも、実態は長崎だけでなく、琉球貿易も、朝鮮口も、松前口も認められています。ですから貿易体制としては鎖国と呼んでいいのかどうかです。四つの港が開いているんです。

それから朝鮮からの使節が来る。琉球使節も来る。オランダ人たちも毎年江戸に上がってくる。外国の情報を知ることが出来る風説書も来る。そういう体制のなかで日本は封鎖されているところではない。ある程度解放され、ある程度は守られているという状況がある。

しかも鎖国という言葉が生まれたのは開国を意識した一八世紀の末ですね。「鎖国」の用語はその後志筑忠雄という蘭通詞がケンペルの『日本史』を翻訳するときに鎖国という言葉を使っている。しかし『徳川実記』のほうでは「海禁」という言葉を使っています。自分から海外へ出ていくことを禁じるという意味です。また水戸学

でもそうした使い方をしています。

そういうなかで薩摩の場合は先ほど申し上げた琉球開国問題というのもあり、そういう土台として斉彬が考えたのは西洋通詞を積極的に育成するというものです。しかし蘭通詞ももう違うんじゃないかということでも英通詞の育成が始まります。そこが薩摩が英語を非常に大事にするところで、薩摩藩は近代国家をめざすときにイギリスをめざしたわけです。表向きには薩英戦争という大きな目に見えるものがありますけれども、すでにそういう動きはあったということが言えるんじゃないかと思います。

つまり開成所では軍事や測量学、それから物理学とか分析学とか色んな学問を教えているところを見ると、単に軍事力の強化をめざしただけでなく、そのうえに何かを載せようとしています。

開成所という名前は東京大学の前身に当たる幕府開成所を真似しようとした、あるいは意識しようとしたものだと思うんですが、薩摩藩では語学を学ぶことは単に言葉を学ぶのではない。通事という言葉自体が、業務内容に通じる必要性がある場合は通詞を通事と書くのですが、言葉だけではない、つまり英語を学ぶということは言葉を学ぶだけではなくて、英語にまつわる様々な習慣・制度や思考を学ぶ、英語学という広い意味で学ぶべきだという考え方です。田尻もそういった影響を受けたと考ええると、非常にわかりやすいんじゃないかと思います。いかがでしょうか。

(青木)

よろしいですか。

今の徳永さんのお話を要約すると、たぶん幕末の薩摩藩が語学を推奨していたのは、語学とは単に言葉だけを勉強するのではない。そのなかの文化やその言葉を使っている人々の生き方を含めて学ぼうとすることが大切であるというふうな雰囲気が開成所のなかに存在した。人間が生きていくなかで一番大事な問題も語学を通じて学んでいたのではないか。ということと質問の寺島宗則との話とは合致しているのではないか。こういうふうなお話だったと理解しました。いかがでしょうか。それ以外にいかがでしょうか。

(鈴木)

商学部昭和四六年卒、専修大学校友会三重県支部の鈴木でございます。今日はどうもありがとうございます。二年前に駒井重格展を三重県桑名市でやっていただいて今回が創立者展二回目ということなんですけども、三重県の駒井先生が私の背中を押していただきました。まして鹿児島まで来させていただきました。

ホテルから西郷隆盛さんの史跡を拝見して、汗をたくさんかいてこの会場まで来ましたが、映画からギャラリートーク、そしてシンポジウムと、今日は一日専修人となって非常に気持ちよく聞かせていただきました。特に鹿児島で、この地でしか聞けないような話がたくさん出てきました。斉彬のいわゆる教育の話とか、それから

会計検査院の話も興味深く聞かせていただいたんですけども、やはり専修大学の学風であります質実剛健、誠実力行という学風がありますが、田尻先生はまさに学風そのものだったんじゃないかという思いがいたしております。そういうことも含めまして鹿児島へ来て良かったなと思っております。

一つだけ教えてほしいんですけど、経済の講義は駒井先生と田尻先生がどういうテキストで、どういう講義をしていたのかということとをちよつと教えていただきたいと思えます。よろしくお願ひします。

(青木)

わかりました。では永江さんがいいですね。お願いします。

(永江)

テキストと言いますと、田尻と駒井は共同で翻訳を行っていたという話がありますが、専修大学に残されているテキストの多くは、当時の学生が講師の話聞き取ってノートにしたものが現在テキストとして残っています。今でも大学では真面目な学生が取ったノートが学生の間で流通することがあるんですけど、それのとても出来のよろしいものであるというふうに考えていただければいいと思います。

実際に当時の専修大学で使用されたものも実務向きにつくられて

いる財政学のテキストであるポリュウの財政学ですね。例えば関税の部ですとか、銀行の部ですとか、その他のように区別して使っていることもございましたし。本日、会場の入口付近のテーブルのうえに復刻版が並んでいたかと思いますが、『経済大意』ですとか『銀行論』『銀行史』ですとか、基本的には翻訳本のテキストにご自身の注釈を入れられたものが入っていました。

さらに大内兵衛という経済学者がいらっしやいまして。『経済学五十年』という本を書かれていますんですが、そこで田尻の授業の風景が紹介されております。これにつきましては、大蔵官僚としての実務の経験と照らし合わせながら非常に具体的な講義をなさったと、自分が大蔵官僚になって日本の財政を動かしているような臨場感があつて大変刺激的な授業であつたと。そのほか、今日はお出でおりませんが、大蔵官僚が多いいことで有名であつたという方なので、田尻の後に東京市長を務めた後藤新平の市政を評するにあつた「後藤の列車がゴトゴト走ってしんぺーだ」とか、そういう話が屢々紹介されております。

(青木)

よろしいでしょうか。

(鈴木)

どうもありがとうございました。

(青木)

設立当初、専修学校では授業の際に教科書は使わないというのが原則だったのです。ところがほかの専門学校が使い出したこともあつて、専修学校も講義録をそのまま活字にしました。古い大学の先生の教育を受けた方々はご存じだと思いますが、昔の先生は今のような講義はしないのです。ノートをずっと読む。一定のところまで来ると止める。そして英文やフランス語の場合はスペルを黒板に書く。そして時には「行を替えて」と口頭で行替えまでさせるような先生がいました。そのような教育を私たちは受けてきたのですね。

つまり先生がお話をする。それを生徒がノートに取る。そしてそれを読んで内容を理解する。そういう形で行われました。学生諸君は欧米の立派な学者たちの講義の内容をそのようにして理解を深めていったのです。テキストを作成するようになったのは、色んなところに講義をしに行くようになってからだと思います。今、永江さんがおっしゃられた通りだと思います。

今日この田尻稲次郎の生涯に関するシンポジウムをお聞きになっていかがだったでしょうか。福沢諭吉や大隈重信など私立大学の創立者の何人かは高校の日本史の教科書にも出てまいります。こういう人たちが近代国家の新しい人材の育成を行ったことは間違いありませんが、それだけでは日本の近代化は達成出来なかつたと思います。田尻のような優れた人材が各地にいて、人材育成に努め今の日

本のための屋台骨をつくっていったと見る方が自然です。そういうふうにと考えると、決して教科書に出てくるような人物だけじゃない、こういう人たちの存在が今の日本の社会をつくっていったんだということをご理解いただけたと思います。本日は長時間シンポジウムにご参加いただきまして本当にありがとうございます。最後に当館の館長の高山大作さんから閉会の辞をいただきたいと思いません。

(高山)

黎明館館長の高山でございます。本日は朝一時から『学校をつくろう』という映画に始まりまして、ギャラリートークそして今日のシンポジウムと長時間ではございましたけれども、最後までお聴きいただきまして誠にありがとうございました。専修大学との合同企画展「田尻稲次郎展」の関連行事としては、これですべて終了しました。日高学長をはじめ専修大学の皆様にはこの合同企画展に多大なるご支援、あるいはご協力をいただきまして、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げます。

今回の企画によりまして、我が郷土出身者の素晴らしい生涯と功績を振り返ることが出来ましたことを、主催者の一人として大変喜んでおられます。関連行事はこれで終わりますが、企画展そのものは一月九日まで開催されております。どうぞお帰りになりましたら周囲の方々に田尻稲次郎という人はこういう人だったと

いうふうなお話などをしていただきまして、是非、黎明館へ足を運んでご催促をいただければ館長として大変ありがたいと思う次第でございます。これももちまして閉会とさせていただきます。どうもありがとうございます。

(青木)

このシンポジウムを終わりにさせていただきます。大変不手際な司会で申し訳ございませんでした。先生方どうもありがとうございます。